

全国同人雑誌最優秀賞 第18回 まほろば賞 発表

第一八回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、全国同人雑誌の三〇〇以上の小説作品の中から選ばれた五作品の優秀作品を対象に、二〇二四年七月三十一日に東京都大田区民プラザ第一会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

新まほろば賞となつて以来、「まほろば賞」は、賞状と賞金三十万円および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特に本年はこれまで多大な御寄附をいただいた木内是壽氏よりまた高島屋特製の美術電気スタンドをまほろば賞受賞者に贈られることになりました。木内氏には厚く御礼申し上げます。

特別賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円および記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第18回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「神女」カミンチュ（四人）105号・106号

大城由乃

特別賞

「黄昏の朝」（文宴）139号

藤原伸久

河林満賞

「父のマリア」（ガランス）31号

入江修山

読者賞

「お仙——続番町皿屋敷」（創）20号

高見直宏

優秀賞

「水路」（あるかいど）74号

渡谷 邦

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「中部ペンクラブ」「北斗」「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など全国同人雑誌協会会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

リアリズムの領域を超えて

三田誠広

候補作五篇はすべてどこかリアリズムの領域を超えたところにテーマを求めている。現実を見つめるだけでは小説を書きにくい時代になったのかもしれない。満場一致でまほろば賞となった「神女」(大城由乃)は沖縄周辺の離島に広く残っている霊と交信できる神秘的な女性を中心に、土建屋の儲け仕事や、うらぶれた飲み屋の風景、沖縄戦の集団自殺など雑多な要素を盛り込んだ意欲作で、通俗的な話を展開させながらも、沖縄ならではの歴史と現代の様相を見事に描ききっている。この地域の霊媒の存在は衆知の

事実であり、リアリズムから逸脱してもファンタジーにはならず、現実そのものを直視し、深く掘り下げることに成功している。

特別賞の「黄昏の朝」(藤原伸久)は不幸な体験を経て神秘的な霊能を得た女が、喫茶店のマスターや周囲の人々の善意に触れてしだいに回復していく物語で、爽やかなファンタジーとして、リーダーブルで魅力的な作品になっている。登場人物のすべてが善人で、話がつごうよく進みすぎることに途惑いを覚えつつも、作者の話術の巧みに驚嘆するしかなかった。

河林賞の「父のマリア」(入江修山)は隠れ切支丹の地に生まれた女と、隠し念仏が伝わる地域の男が出会うロマンスで、候補作のなかでは唯一リアリズムで書かれているようではあるが、宗教というものが深く絡んでくるところに、独特のムードが感じられる不思議な作品になっている。父の足どりをたどって息子が隠れ切支丹の地を訪ねるという設定に安定感はあるが、いくぶんインパクトが弱くなつた。小説は虚構なのだから、思いきって父そのものを主人公として描ききる冒険をしてほしかった。

惜しくも受賞は逸したが「水路」(渡谷邦)も魅力的な作品だった。一種のドッペルゲンガーなのだが、その種の作品にありがちなもののしさがなく、淡々とした日常性のなかに、妻と似た女が家庭のなかに入り込んでくる。ス

リリングな設定ではあるが、妻が女のパートの仕事の代役をするというささやかな冒険のほかには何事も起こらない。大げさに問題提起するのではなく、さりげなく日常性の裂け目のようなものを描き出す作者の筆致は都会的で、そこに新鮮なものを感じた。

最後の一篇「お仙——続番町皿屋敷」(高見直宏)は同人誌には珍しい時代小説で、有名な皿の枚数を数える幽霊が出てくるのだが、古風な文体に強度があり、独特の世界観を見せてくれる。同人誌の書き手のレベルの高さを改めて感じるようになった。



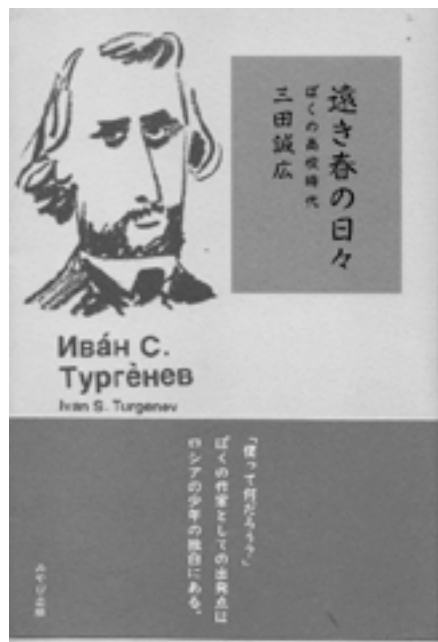
こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

今回も力作ぞろい

小浜清志

今回も力作ぞろいで、選者の一人として読み終えると深いため息をつき呻吟することの繰り返しであった。主に日本文芸山のすそ野は限りなく広がりがつつあるのではないだろうかと楽しい夢想を抱いてしまう。

同郷のよしみとして、「神女」(『四人』105号・106号)大城由乃を最初に読んだ。迫力のある物語の展開と神女(カミメチユ)という不思議な存在がこの作品を重層なものにしている、当選作になることに異議は唱えなかった。沖縄の人にしき書けない作品であるが、神女という想像の人物を作り上げたことが必ずしも成功しているとは思えなかった。しかし、作者の作品に対する強い思いは行間からあふれていて読後感



三田誠広文学の原点をなしてみずみずしい輝きを放つ傑作。
みやび出版 1500円+税

も良かった。まほろば賞受賞おめでとうございます。

「黄昏の朝」(『文宴』139号) 藤原伸久を興味深く読んだ。キリコという女性の人には見えないものが見えると言う能力が三年前から突然現れたという。まず、タカシの喫茶店にきて、すぐタカシの左手に白い蛇が巻き付いていると告げられた。タカシはただ茫然となる。「信じてもらえないのも分かっていますが腕をカウンタに置いてください」キリコはそう言うなり、絡まったヒモをほどくように、両手を手首の辺りで動かしている。そして、取れたと言い、「痛いですか?」と聞いてくる。我に返ってみると痛みがきれいになくなっていることに気づく。

キリコの魅力を見せつけて作品が展開するが、読み手を決して飽きさせない工夫もみごとである。キリコの過去も明かされてきて二人は結ばれる予感を残して作品は終わる。私は当選作でもいいと思っていたが、題名の悪さを指摘されると反論できなかった。

「水路」(『あるかいど』74号) 渡谷邦、夫によれば、どうも水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい。という書き出しからしてこの作品の異様さが垣間見えるが、わたしに似た女と出会い後をつけていきアパートを知る。翌日わたしはあの女のアパートへむかう。自分が何をしたいのかさえわからなかった。部屋は明かりがついていた。外階段をあがり部屋の前に立った。そのとき部屋の中からドスンと

いう音がして、女の金切り声が聞こえた。慌てて戸口から

離れ換気扇の下に壁に隠れ耳をすます。男の怒鳴り声と女の金切り声がつづき男は出ていった。わたしは女のもとに行き声をかける。女はただ殴られたけどそっけない。わたしは自分の住所と電話番号を書いて女に渡して帰る。何日かして女が現れる。靴を間違えていた事を指摘される。しかし、女はそのまま住みつき、わたしは女の代わりに弁当工場にもいく。変わった人物と奇妙な展開はあるが敢えて作者は深掘りをしようとしないうちに見ることが少し残念であった。

「お仙——続番町皿屋敷」(『創』20号) 高見直宏、夏の怪談話であるお皿が一枚二枚という皿屋敷の物語を見事にまとめた作品で一氣に読ませてくれた。時代物ではなく現代の作品がどうしても読みたと思いました。

「父のマリア」(『ガラン』31号) 入江修山、隠れキリシタンの女と恋に落ちた父の足跡をたどるはなしである。しかし、恋に落ちた二人の気持ちがいかに書かれていないのが淋しかった。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」「破壊者たち」

女性の感受性と能力

五十嵐勉

今回は大城由乃氏の「神女」^{カミメチユ}が圧倒的で、扱っている題材と、文章の迫力と、ストーリー展開のおもしろさと言、抜きん出ている。沖縄には、東北地方と並んで日本で最も憑依能力の高い風土があり、ユタとかカミンチュはその代表的なシャーマニズムの超能力者だが、この作品によってその世界をよく味わわせてもらった。この能力を小説に展開する作品には初めて接したが、AIが代表する機械化や組織化が進む現代において、むしろこういう世界が異様な新鮮さでダイナミズムを喚起するのはおもしろい現象だと、あらためて反時代的な可能性を感じた。この能力は、歴史の中に眠る怨みや怒り、矛盾や理不尽さや

残忍さを自由に取り出せ、現代に蘇生させることができる。小説というフィクションを武器にする表現方法にとつては、極めて有効な可能性を提示している。この霊媒の能力によって過去と現代を自由に行き来でき、怨嗟や人間の叫びを自在に取り出せる方法装置がここにはある。この方法と舞台装置を使えば、沖縄にある問題を現代に鮮明に浮かび上がらせることができ、血肉を備えた作品として生き生きと歩き出させることができる。例えば、米軍基地の問題にしても、島津の侵略にしても、中国との問題についても、はたまた現代のミサイル基地の問題にしても、この超能力者たちが呼び寄せる現実のシーンとして再生可能になる。私がこの小説と筆者に大きな可能性を感じたのは、それが方法として大きなポテンシャルを備えているからだ。ただ、これを実現させるのは、過去の歴史にもよく目を凝らし、様々な見識と洞察を身に付けて、かつまたそれを表現する高い表現能力を身に着けた上でのことなので、単なる期待に終わる確率も少なくない。ただ私としては、感じる以上可能性に賭けてほしい気はした。

この作品自体について、褒めることはたくさんある。沖縄の裏町の酒場などよく書けているし、不動産業の野心性の絡みもおもしろく読ませる。特に神女の梓が神の森で試練を受ける彷徨いは、ありふれた商業文芸誌にはけっして出てこない狂気と日常の境目が露出している。沖縄戦の少

年の爆弾で粉碎される場面、少女たちの自決場面は迫力があって、強烈な生々しさがあるなど、枚挙に暇がない。また読み終わって、小説的なおもしろさや充実感が残ることも、まほろば賞にふさわしい。一般書店に流通させても、かなり読む人がいそうな手ごたえを感じた。今後がたいへんだが、ぜひがんばって、この世界をさらに生かしていつてもらいたい。

今回はたまたま女性の超能力・感受性・宗教性のような共通な力が全作品に通底する結果になって、興味深かったが、特別賞の藤原伸久氏の「黄昏の朝」も、主人公のキリコが他人の病んでいる部分を癒す特別な能力があって、ストーリーの牽引力になっていた。キリコについてはとてもよく書けていて、その魅力が読み手を引っ張っていく。途中からキリコがなぜその能力を身に付けたか、キリコの過去に入っていくところからマスターとの個人間も深まり、キリコ自身が癒されてハッピーエンドになっていく。その流れも鮮やかで読者を楽しませるストーリー・テラーとしての筆者の卓越した力が窺われるのだが、私には二つ気になることがあった。一つは主人公のマスターの存在が希薄で、人物として生きていないことである。何を悩み、何に困り、店をどうしたいのか、人物が見えてこない。それが不満だったのと、もう一つは、タイトルで「黄昏の朝」は何を言っているのかイメージが浮かばない。相反する言葉

で示してくれた、優れた作品だった。

渡谷邦氏の「水路」は、別な角度から女性の不思議な感知力を見せてくれた小説である。選考会ではかなり評価が高かった。「自分に似た女性がいる」ことから、その女性に気がなり、近づいていく。その女性がしだいに自分の生活に入り込んできて、互いに入れ替わるように、その女性の働き先に代わりに出ていくようになったりする。その間、絶えず水路に水死体の話が入り込む。幸福と不幸、日常と非日常の間が見え隠れしながら、最後は平穏な日常に戻っていく。非日常を垣間見させて、不運や不安を覚えさせるその手腕は高度なもので読ませる力は横溢しているが、この作品に結果的にインパクトがないのは、幸福の側にあくまで留まり、けっして負の領域には転落していかない安全さの側に書き手がいるからだろう。ちよい見せの手腕はすばらしいが、どこまでも勝ち組の側に留まる姿勢に、人生には絶えず待ち受けている落とし穴の恐怖が本格的に伝わってこない恨みがある。この側に足を踏み入れ、しっかりと書けるようになれば、おそらくこの作者は飛躍すると思われる。期待度と言う点では、大きなものが残った。

全体を通して、今回も充実した読後感を覚えた。まほろば賞の作品は商業誌のレベルを凌駕する同人雑誌の実力を世に示している。今後も同人雑誌の情熱ある創作の力を期待したい。

なので、無理がある。たとえば「キリコの段ボール箱」のようなタイトルなら、おもしろみも増したように思った。

河林満賞の入江修山氏「父のマリア」も女性と宗教の問題を骨格にしている。薬売りの父が行商先で知り合った恋仲の女性と愛を誓い合うが、宗教の違いから、結ばれることなく、別の道を歩む。しかしその誓いは心の奥で守られ、女性は生涯独身を貫き、薬売りの男は別な女性と結婚するものの、息子にその女性の名前を付けて誓いに添う。息子が晩年の女性の元をはるばる訪ね、女性の一途な貫きを、自身の名に重ねるというストーリーは、海上での光の中の逢引が昇華されて、美しい。貫きが生きる道筋に光り残る作品だった。

読者からの支持が最も多かったのは、高見直宏氏の「お仙——続番町皿屋敷」である。この作品は岡本綺堂の「番町皿屋敷」を下敷きにしているものの、そのあとの独自のストーリー展開と文章力はすばらしい。井戸からお菊の亡霊が皿を数えて現れるシーンは、思わず背筋がゾッとするとどの出来栄で、この卓越した文章力だけでも何かの賞に値する。また権次やそれが憑依したと見られる野良犬など周囲の人物や動物の描写もメインの流れをしつかり支えていて盛り上げている。お菊の恋の成就への落ちも、真弓というしつかりした女性の存在も、それぞれに配置の妙を醸して、成功している。時代小説の可能性をあらため



なかみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミヤンマの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

女性たちの不思議な力

中上紀

二〇二四年も暑い夏の盛り、「まほろば賞」の選考会が大田区民プラザにて行われた。三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各選考委員の方と久しぶりにお目にかかったが、皆さんますます健康で精力的にお仕事をされ、暑さ負けしつづあった私は圧倒されるばかりだった。

さて、素晴らしい候補作五作を読ませていただいた。今回の作品はすべてにおいて人間ドラマがことさら色鮮やかに描かれていると思った。読みながら何だか、あれもこれもAIに頼るのではなければスマホ内でクリーンに補正、完

結され、汗臭く汚く不格好な人間であることがまるで罪であるかのような今の日本で息をする私たちに対して、痛烈な皮肉が突きつけられているようにも感じた。

また、五作品に描かれた、切腹に心霊、ドッペルゲンガー、シャーマニズム、神女、薬売り、隠れキリシタンに隠し念仏と言ったものの特殊性にも注目したい。普通に暮らしている限り、触れる機会ほとんどない要素である。だがこれらはファンタジーではなく、歴史のどこかで、あるいは今でも地方のどこかで、確実に起きた、あるいは生きて存在している要素でもある。

高見直宏氏の「お仙——続番町皿屋敷」は「まほろば賞」の候補作には珍しい時代小説であるが、ここで冒頭から扱われる播磨の切腹に至る経緯は、怪談にもなった「皿屋敷」の話をもとにしたドロドロの愛憎劇だ。しかしながら、屋敷で働いたお仙が自分が生き残るために告げ口をしたことや、実は皿を一枚盗っていたということなどは、非常に人間的であり、現代にも通じるリアリティがある。ただ、お菊と播磨の恋愛そのものの様子をもっと読みたかった。その部分があれば、お菊がどうしてそこまでのことをしたのか、より心を重ねられると思った。ちなみに、「まほろば賞」候補作にはよく動物が登場するが、この作品でも犬が大活躍し、大いに読ませる場面であった。

ドッペルゲンガー、つまりそっくりな顔の人物について

を深め、やがて船の上であいびきをする仲になるが、「隠し念仏」の宗教を背景に持つ和ひとキリシタンの文は最後まで理解し合うことが出来ない。その越えられなさがとてもし痛々しく描かれている。だが注目したいのは、抱き合ったまま小船に乗って流されて行く場面である。それはまるで熊野那智の浜でかつて行われた補陀落渡海の死出の旅のようで、宗教に阻まれた愛なのに多分に宗教的だ。二人は助かったが引き裂かれ、何十年も経った後に息子の文夫はその話を聞き、自分の名前に二人の愛の証を見えるというラストよりも、その流れている場面に感動があると思った。

「特別賞」を受賞した藤原伸久氏の「黄昏の朝」では、キリコという不思議な力を持つ女性を軸に話が進む。喫茶店が磁場となっており、そこで冴えない見た目をした彼女は多くの人々を癒すが、並行するように彼女の痛みも明かされていく。キリコは、皆のことを癒しながら、実は自分が癒されていたのだらうか。本作は読み応えのある場面も多く、「ペンギンの合唱」など、動物の描写も楽しい。彼女自身の痛みの中心である事故死した息子の話をしたのち、キリコは美しく明るい女性に変貌していく。女性の持つ霊力あるいは何らかのパワーを、小説として語る「意味」のようなものを強く感じさせた作品だった。

宗教や風習、あるいは工場の勤務の中身など、なかなか知ることのできないことにも触れられたことも、今回の「ま

描いたのは渡谷邦氏の「水路」だ。自分に似た女をずっと追いかけていくという行為は、否が応でも読み手のページをめくる手を速まらせるだろう。進んでいく道が、綺麗な遊歩道から、どんぐんぬかるみのような路地に変わっていくのもいい。途中で「気をつけろよ」とか「誰々が水路に落ちた」などと言ってくる奇怪な老人の存在も、異世界の入り口に立つ、地獄の番人のように絶妙だ。そっくりな顔の女はやがて主人公たちの家にやってくるようになり、やがて工場勤務の女に代わって主人公が働いたり、「取り替え」のようなことが行われる。その間に女が主人公の夫と関係を持つのではないかと下世話な想像を読者はするかもしれないが、残念ながらそれは起きない。だが工場では顔をすっぽり覆う服装が課される。誰だかわからなくなるということは、誰にでも交換可能、つまりこれは、誰の心の中にもある欲望の一つなのではないか。主人公はそこですでに女になり変わっており、女は主人公になっているのである。工場から出てきたのが女なのか主人公なのか、誰にもわからない。それはある意味、男女の関係を持つと同じことだ。

「河林満賞」を受賞した入江修山氏の「父のマリア」では、そこに描かれる薬売りという仕事の奥深さと過酷さがまず目を引く。主人公の父、和一は薬売りとして隠れキリシタンの居住地に出入りしながら、文という若い女と親交

まほろば賞」の収穫と言えるだろう。また、特筆すべきことは、それぞれの作品で女性を中心となっているということだ。そればかりか、不思議な力を持っている女性も複数いる。それは、男性がある意味こうした何らかの「力」のある女性に、どこか依存している、それが今すぐく見えてしまっている時代だという意味かもしれないと思う。

その中でも現代に生きるある女性の問題から繋がる形で、沖縄に伝わる神女という伝統の信仰、シャーマニズムそして戦争の時代とリンクしている大城由乃氏の「神女」に最も高い票を入らせていただいた。

文字の一つ一つに、神がかったものを感じたのもそうだが、やはり今広く読者に伝えるべき沖縄戦の歴史、凄惨な事実として、もしかしたら、当事者がまだぎりぎり存命している今だからこそ、リアルなボイスとして伝えられる最後のチャンスかもしれないということ、それを女性ならではの繊細な視点、名前は変えられているが久高島と思しき離島に生きるシャーマニズムを通して有無を言わさない説得力として、記されていると思った。特に、幼い娘の片方の目を失わせてまでの神がかりには、驚きを隠せなかった。フィクションにしかできないことであるが、それでも虐待、ハラスメントを問われる可能性を恐れずここまで書くということ、作家が書きたいものを書けなくなってきた昨今の風潮に一石を投じるようでもある。最後まで迫力

のある作品だった。

スマホ化した都会の日常で私たちが失った何か、もはや物語でさえも伝えることが難しくなってしまうものを真摯に伝えるということ。また一つ、小説の役割というものを感じた。選考会後、打ち上げの席で、五十嵐勉氏が「まほろば賞」を受賞した「神女」の著者大城由乃氏に受賞の連絡をする際に、ひとことだけお祝いをお伝えさせていただいた。沖縄の太陽の下の波のように優しくおらかなお声に、私も元気を貰った。



第18回まほろば賞選考会風景 2024.7.31 大田区民プラザ第一会議室にて

まほろば賞

「神女」
カミンチュ

(「四人」105号・106号)

大城由乃



今回は特別贈賞として、木内是壽氏より御寄附いただいた高島屋製デザイン電気スタンドをお贈りします。

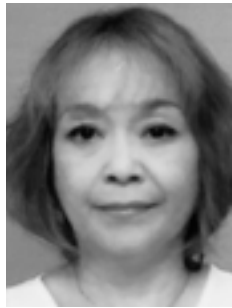


まほろば賞 受賞の言葉 大城由乃

このたび、身に余る名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございました。

吉報をお受けさせて頂いた時の驚きは、これまでの人生の中で最も大きなものでございました。同時に大変光栄に思いました。これもひとえに「四人」の同人誌と合評会などに於いて、同人の方々から多くの学びと御指導を賜りましたお陰でございます。

また先生方をはじめ他の同人雑誌の秀作を拝見させて頂く機会にあずかったことも、大いに勉強になりました。今回の受賞を励みに、「まほろば」という言葉にふさわしい作品を書いていけるよう、これからも邁進していく所存でございます。このたびは誠にありがとうございました。



大城由乃

おおしろ よしの
1961 沖縄県旧糸満町生れ
97 飲食店経営の傍ら詩作
2015 頃より小説を手掛ける
21 同人誌「四人」入会
沖縄県在住

特別賞 受賞の言葉 藤原伸久

選んでいただきました。有難うございます。誰も見向きもせず、新聞の書評にすら取り上げられることのなかった作品が特別賞に選ばれるとは!! まさに驚天動地、寝耳に松竹梅でございました。ゼロではないが何物にもなり得ない私の小説もようやく日の目を見たやらないのやら……。ふだんは野山を駆けずり回り、言語からはるかに遠ざかって野放図に生きております。光と影、花と枯木、妄想と理想が洗濯機の脱水槽のように渦まいて日常でございますが、その中で書くことが独立して単一化され、それ故救われることの多い毎日であります。今日も小説の舞台となった水族館前で、飼育員さんと話しながら魚を釣り、アシカの声を聞いておりました。形あって定まらぬ生活の中でポツリポツリと題材を拾い集め、定まらずして形をなす小説を書いております。人生は小説よりもフィクションを体現すべくこれからも精進流転いたす次第でございます。謹白。

まほろば賞

特別賞

「黄昏の朝」

（「文宴」139号）

藤原伸久



藤原伸久

ふじわら のぶひさ

「文宴」同人
中部ペンクラブ・津文研会員
三重県文学新人賞・同奨励賞受賞
中部ペンクラブ賞受賞
原稿はすべて手書き
トライアスロン・登山・ボルダリングなど多才



風媒社 1500円



まほろば賞

河林満賞

「父のマリア」

（「ガランス」31号）

入江修山



いりえ しゅうざん

1951 宮崎県生まれ
30代に福岡県で塩野実（松原新一）氏の文学学校に学び、同氏主宰の「河床」同人として小説を本名で連載する
51歳で脱サラ就農し、有機稲作農業経営の傍らに随筆と小説を「ガランス」に投稿する。同誌の会員となり、近年は郷土史を基にした作品を筆名で創作している

河林満賞 受賞の言葉 入江修山

この度の受賞を、まことにありがとうございます。思いも掛けない入選と受賞です。これは、わたしの力ではありません。貴重な文献を書き残された先学諸氏と雑誌「ガランス」及び梓書院の編集の方々、さらには、図書館・資料館・博物館・文化財係の方々から頂いたお力とご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。やむに已まれない思いで書いてきて、七十代の老境となりました。

自分が終焉を迎えるであろう土地の歴史を紐解いて小説にしたいと考えて四年目になります。今後もある限り、郷土史小説の創作に励みます。

まほろば賞発表



入江修山

まほろば賞

読者賞

「お仙」——続番町皿屋敷

（「創」20号）



高見直宏



高見直宏

たかみ ただひろ

1962 静岡県浜松市生まれ

愛知県名古屋市在住

2018「弦の会」同人

20「掌編小説ムーの会」に加わる

23「創」に加わる

読者賞

受賞の言葉

高見直宏

思いがけない評価を頂き、身が引き締まる思いです。本作は岡本綺堂著「番町皿屋敷」の続編として創作しました。書き出し、キャラクターを継承し、伏線まで「番町皿屋敷」を基にしました。この場を借りて、亡き岡本綺堂先生に御礼を申し上げます。

「ありがとうございます」

未熟者ですが、今後も精進を続け、本作を超える作品の創作を目指します。読者の皆様、文芸思潮様、同人の皆様には感謝します。



まほろば賞
優秀賞

「水路」

（「あるかいど」74号）

渡谷邦



渡谷邦

わたりだに くに

1955 広島市生まれ

岡山大学法文学部仏文科卒業

2013 年大阪文学学校入学

21 年より「あるかいど」同人

岡山市在住

